

就学前児の社会的スキル

—— コホート研究による因子構造の安定性と予測的妥当性の検討 ——

高橋 雄 介* 岡田 謙 介** 星野 崇 宏*** 安梅 勅 江****

社会的スキルは、他者との関係を円滑に進めるための技能である。就学前期における社会的スキルの獲得の失敗やその非定型的な発達、のちの問題行動や不適応、学業成績の低さなどの予測要因となることが多くの先行研究により明らかになっている。しかし、こうした重要な発達段階である就学前期の子どもたちを対象とした社会的スキルの測定ツールは国内においてほとんど提案されていないのが現状である。そこで本研究では、全国規模のコホート調査を行い、就学前児を対象とした社会的スキルの個人差を適切に測定できる尺度を開発した。作成された就学前児用社会的スキル尺度は欧米の先行研究で繰り返し確認されている協調・自己抑制・自己表現の3因子構造を持ち、高い内的一貫性及び経時的安定性を示した(研究1)。また、外的基準として問題行動と自閉傾向を縦断的に測定して本尺度との関連を分析した結果、提案する尺度は十分な併存的妥当性及び予測的妥当性を持つことが確認された(研究2)。本尺度によるスクリーニング及びそれに基づいた早期介入は、就学前期以降における子どもたちの健全な発育に寄与するだろう。

キーワード：社会的スキル、就学前児、コホート研究、問題行動

問題と目的

人間は、生まれた直後から周囲の人たちからの働きかけを受けながら成長・発達する社会的な存在である(Bronfenbrenner, 1979)。そして、子どもたちが自らの働きかけで社会的な存在となるためのプロセスとして、親子の関係と並んで、仲間との関係や教師・保育士との関係も非常に重要である(向井, 2003)。子どもたちは、家庭以外の場所において、仲間同士の遊びや親以外の大人との相互交渉の場面を通じて、社会の中で他の人とうまく折り合っていく方法や社会で認められたルール・行動を身に付けるようになる。広義の社会性とは、このように、自分の属する社会が支持する生活習慣、価値規範、行動基準などにそった行動が取れるという全般的な社会的適応性を指す(繁多, 1991)。その一方で、やや狭義に社会性や社会的な行動をとらえるための概念として、社会的スキルがある。社会的スキルという用語における「社会的」とは「対人的」とほぼ同義である。すなわち、社会的スキルとは、簡潔には「対人関係を円滑にすすめる具体的行動(菊池, 1988)」, 「他者

との関係や相互作用のために使われる技能(相川, 1996)」, 「対人関係を切り結ぶための基礎的な能力(二宮, 2006)」ということになる。

Gresham (1986, 2001) は、社会的スキルは、「仲間からの受容」, 「行動」, 「社会的妥当性」の3つの観点にしたがって研究が進められてきたと述べている。「仲間からの受容」の観点からすると、子どもの社会的スキルは、仲間から好かれて受け入れられている程度によって評価される。しかし、この評価では、その子どもの何かに秀でたところによって人気があったり尊敬の念を集めていたりするだけかもしれない可能性が捨てきれない。「行動」とは、行動論的な観点から子どもの社会的スキルを考え、その子どもが他の子どもからよく受け入れられ、周囲からの強化を増し、罰を低減させ、結果としてポジティブな関係を促進させる行動によって子どもの社会的スキルを評価するものである。この観点は、Argyle (1981) などによる「相互作用する人の目標を実現するために効果のある社会的な行動」といった行動的側面を強調した定義と近い。そして、行動論的側面からの観点の拡張が「社会的妥当性」からの観点である。社会的妥当性の観点では、ポジティブな社会的結果を予測するような、大人や教師から見て重要かつ適応的な行動パターンを社会的スキルと考える。この観点は、Combs & Slaby (1977) などによる「社会的に受容・評価され、その人個人にも相手にも

* 東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会
takahashi@bayes.c.u-tokyo.ac.jp

** 東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会

*** 東京大学大学院総合文化研究科

**** 筑波大学大学院人間総合科学研究科

お互いに有益であるような特定の方法によって、社会的文脈の中で相手と相互作用し合う能力」という能力面を強調した定義に近いと言える。さらに、各スキルについて具体的に見ていけば、相手に話し掛けたり、相手の話を聞いたりするコミュニケーションに関わる初歩的なスキルから対人関係での葛藤を処理したり、計画的にものごとを進めたりする応用的なスキルまで多岐に渡り(二宮, 2006), 社会的スキルという概念がいかに包括的で多義的, かつ複雑であるかを窺い知ることができる(相川, 1996; Korinek & Popp, 1997)。

欧米における社会的スキルの諸研究は、社会的な適応に問題を抱える成人に対する治療, 介入に端を発するが, それらの研究で蓄積された知見や具体的な訓練方法は社会的スキル訓練 (Social Skills Training; SST) として, 子どもたちに対してもその介入有効性が確認されている(江村・岡安, 2003; マトソン・オレンディック, 1993)。社会的スキルは, 正常発達によって学習可能な行動であると想定されているので (Gresham & Elliott, 1984), 子どもたちの社会的スキルに関する研究の大きな意義のひとつは, その介入可能性, 学習可能性にあると言えるだろう。発達初期における社会的スキルの獲得の失敗及び機能不全, 未成熟や非定型発達は, のちの問題行動 (e.g., うつや不安などの内在化問題, 注意欠陥性多動性障害や反抗挑戦性障害などの外在化問題, アスペルガー症候群や自閉などの広汎性発達障害など), 社会的不適応, 学校不適応, 学業成績の低さの予測要因となることが知られている (Coie & Dodge, 1983; Gresham, 1981; Parker & Asher, 1987)。したがって, 社会的スキルの獲得や発達が十分ではない子どもたちに対して積極的に介入を行ったり予防策を講じたりすることは非常に重要なことである。そのためには, まず社会的スキルについて適切にアセスメントを行うこと, すなわち, その研究がターゲットとしている年齢層や発達段階でどのような社会的スキルが必要とされているのかを明らかにしたうえで的確な評価を行うことが求められる。本研究がターゲットとする年齢層は 4~6 歳の就学前児である。4~6 歳という就学前期は, 来るべき就学, 来るべき社会的活動領域の膨大な増加に備えて, 社会的スキルを十分に身に付けておく必要があると考えられる重要な発達段階である。しかし, 小学校児童を対象とした社会的スキル尺度はすでにいくつか存在するものの (岡田, 2003; 嶋田・戸ヶ崎・岡安・坂野, 1996; 鈴木・庄司, 1990), 就学前児のみを対象とした社会的スキルの測定ツールは現時点において非常に少ない¹。

このように, 操作的定義は数多く存在するにもかか

わらず, 測定ツールが不足しているという現状を鑑み (相川, 2000), 菊池 (1989), 菊池・堀 (1988) が指摘するように, 社会的スキルに関する研究は, 特定の年齢層や特定の発達段階でどのような社会的スキルが必要であるかを明らかにしながら検討を行っていく必要があるだろう。そこで, 本研究では, 4~6 歳の就学前児を対象とした社会的スキル尺度の開発を行い (研究 1), その妥当性を検証する (研究 2)。具体的には, まず研究 1 では, 全国規模で就学前児に対して行ったコホート調査に基づいて, 4・5・6 歳の 3 時点において就学前児の社会的スキルの個人差を適切に測定できる尺度を構成する。研究 2 では, 研究 1 で構成された尺度を用いて, 問題行動 (内在化問題, 外在化問題) と自閉傾向との相関を検討し, 尺度の基準関連妥当性 (併存的妥当性, 予測的妥当性) を検証する。

研究 1

「問題と目的」で概観したように, 操作的定義が多数存在する社会的スキルという複雑な概念は, おおよそどのような構造をもつ概念として研究されてきたのだろうか。就学前期から青年期にかけての社会的スキル

¹ 本研究が対象とする就学前児の社会的スキルを測定できる可能性のある既存の尺度としては, (1) マトソン年少者用社会的スキル評価 (Matson Evaluation of Social Skills with Youngsters; MESSY; マトソン・オレンディック, 1993; Matson, Rotatori, & Helsel, 1983), (2) 幼児用社会的スキル尺度 (渡邊・岡安・佐藤, 1999) が挙げられる。MESSY の対象年齢は 4~18 歳で, 非常に幅広い適用範囲が特徴であるが, 先行研究では 8 歳以上の児童/生徒を対象としていることが多く (Matson, Esveltd-Dawson, & Kazdin, 1981; Matson, Heinze, Helsel, Kapperman, & Rotatori, 1986; Matson, Macklin, & Helsel, 1985), 就学前児を対象とした研究があまり見られない。また, MESSY で仮定されている 3 つの下位次元は, (a) 適切な社会的スキル (appropriate social skills), (b) 不適切な社会的スキル (inappropriate social skills), (c) 種々雑多な項目 (miscellaneous items) と非常に漠然としており, とりわけ (c) 種々雑多な項目には, 問題行動傾向を測定する項目と相違ないものが含まれていて, 問題が大きい。幼児用社会的スキル尺度は, Social Skills Rating System (SSRS; Gresham & Elliott, 1990) を元にして作成された尺度である。SSRS の原版は, 本論文においてレビューを行った 3 因子構造が抽出されているものの, 幼児用社会的スキル尺度を用いた先行研究によると, 本来 30 項目ある尺度構成のうち, 25 項目だけを用いた 4 因子構造 (渡邊・岡安・佐藤, 1999), 16 項目のみを用いた 3 因子構造 (磯部・佐藤, 2003) となっており, 「因子構造が安定しない」, 「文化的に日本国内であり適用しない項目が含まれているかもしれない」などの可能性が考えられた。本研究の目的は, 就学前児のみを対象とした社会的スキルの測定及びその構造の検討にあるので, これらの既存の尺度は, 項目群作成のための参考に留めた。

を分類した、海外のいくつかの先行研究を紐解いて見ると (Caldarella & Merrell, 1997; Elksnin & Elksnin 1998; Gresham & Elliott, 1990; Kolb & Hanley-Maxwell, 2003; Pedersen, Worrell, & French, 2001; Walthall, Konold, & Pianta, 2005), 最も大きな区分で3次元が繰り返し記述されていると考えることが出来る。繰り返し記述される大枠の3次元とは, Social Skills Rating System (SSRS; Gresham & Elliott, 1990) で用いられる「協調 (cooperation)」, 「自己抑制 (self-control)」, 「自己表現 (assertion)」である。協調は, 他人を手助けする, モノを共有するなど仲間や大人に対して協調的・共感的な行動, 自己抑制は, 葛藤場面で適切に対応できる, 交代や譲歩ができるなど自分の欲求や要求を抑えたうえで振舞う行動, 自己表現は, 自己紹介ができる, 会話を引っ張る, 要求をきちんと述べるなど自分自身や自分の意思を明確に説明・表現する行動のことをそれぞれ表している。

そこで, 本研究では, 4・5・6歳の3時点において社会的スキルの個人差を適切に測定できる尺度構成を目指しつつ, 協調・自己抑制・自己表現に相当する3次元が国内の4・5・6歳児のデータでも再現されるかどうかについて検討を行う。もしその3因子構造が確認された場合には一貫性係数 (Tucker, 1951) を算出して, 4～6歳の年齢時点間における因子構造の安定性を確認する。また, Van Horn, Atkins-Burnett, Karlin, Ramey, & Snyder (2007) は, この3因子構造は, 性別を超えて安定であることを示しているのので, 男女児間の安定性についても確認を行うために, 性別ごとに同様の分析を行う。さらに, 抽出された因子を構成する項目の和得点の信頼性 (内的一貫性, 再検査信頼性) を検討する。

方 法

被調査児 2000年から2006年にかけて, 全国夜間保育連盟に加入している全国21都道府県98か所の認可保育所を対象としてコホート調査を年1回行った。本研究における被調査児は, 通常 (昼間) 保育もしくは延長 (夜間) 保育を利用する4～6歳児である。各保育所の担当保育士が, 園児用発達チェックリスト (安梅・篠原・杉澤・丸山・田中・酒井・宮崎・西村, 2007) を用いて, それぞれの子どもの発達状態 (運動発達, 社会性発達, 言語発達など) について評定を行った。その結果, 10,981名 (男児5,593名, 女児5,310名, 不明78名) の完全に有効な回答を得た。このうち, 本研究において分析対象としたのは, 4歳児4,140名 (男児2,109名, 女児2,030名, 不明1名), 5

歳児3,993名 (男児2,054名, 女児1,935名, 不明4名), 6歳児3,122名 (男児1,581名, 女児1,539名, 不明2名) であった²。なお, 信頼性の高い評価を目指すため, 各保育所2名以上の保育専門職を対象に, 研修会を数回開催して, 本調査の目的と方法の説明を行った。さらに, 研修会の場で, 実際に評定に参加する各保育所の保育専門職同士で実際に評価してもらい, 評定結果が85%以上の一致率を示すことを確認した。また, 評価マニュアルを配布し, 詳しい内容を明記し, 不明な点に対応できるように配慮した³。

質問項目の作成 既存のさまざまな発達検査や質問票で使用されている項目を参考にしながら (遠城寺, 1978; Frankenburg, Dodds, Archer, Shapiro, & Bresnick, 1992; 中瀬・西尾, 2001; 津守・磯部, 1965), 複数の子育て支援専門職との議論を行い, 予備的調査において保育園で担当専門職が評価しやすい項目となるように改善を加えながら, 最終的に70項目の社会・対人技術発達評価項目群を作成した。それぞれの項目は, 「ない」, 「ときどき」, 「いつも」の0点から2点までの3件法で評定された。

結果と考察

先行研究で繰り返し確認される3因子構造が国内のデータでも再現されるかどうか検討するため, 各年齢時点別の社会・対人技術発達評価項目群に対して, 最小二乗法による探索的因子分析を行い, プロマックス回転を施した。スクリープロットや因子の解釈可能性にそって, いずれの年齢時点においても3因子解を採用した。いずれの因子についても原則として, いずれかの年齢時点の因子負荷量が.30以上の項目を採用し, そのうち複数の因子に対して重複した負荷を示した項目は除かれた。さらに, 利用時の簡便性と協調・自己抑制・自己表現に関連するかどうかという内容的妥当性の観点から項目選定が行われ, 最終的に3因子各10

² 各年齢時点のサンプル数と総サンプル数が一致しないのは, コホート調査のため, 各年次で繰り返し評定された児がいることや保育園からの転出・転入があったためである。

³ 例えば, 「『あとで』と言われて待つことができる」という項目については, 「やりたいことや欲しいものがあっても, いい聞かせれば, だだをこねないで待つことができる。単にあきらめるのではない」という説明が付記されている。また, 「気になる行動」に関する項目群を評定する際の注意事項としては, 「同じ年齢の子どもと比較して『普通ではない』と考えられるほど, 『気になる』項目についてチェックを入れ, 発達のある段階で普通に見られるものについては除外してください」などの説明が追加されている。

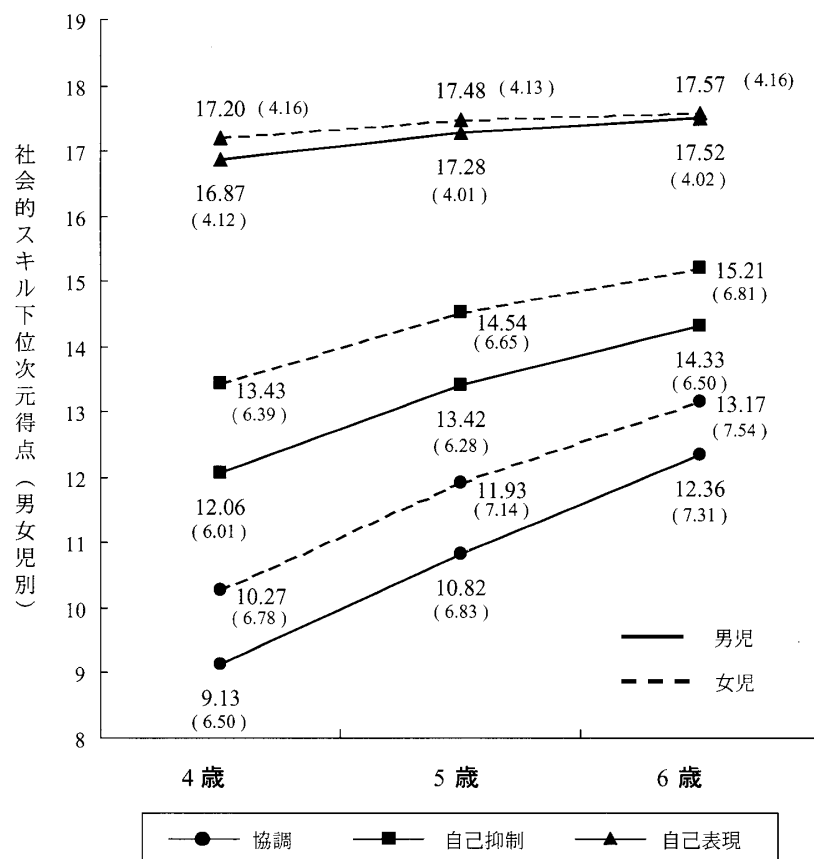
項目合計 30 項目が採用された。Table 1 に当該の 30 項目に対する因子分析結果を示す。3 因子解の累積寄与率は、4 歳時点では 51.28%，5 歳時点では 61.54%，6 歳時点では 56.90% であった。第 1 因子は他の子どもに対する共感や向社会的な行動を表す「協調」、第 2 因子は我慢や自制を表す「自己抑制」、第 3 因子は自分の気持ちや考え、行動を適切に相手に対して表出できる「自己表現」をそれぞれ示していると解釈され、単純構造に近い因子パターンを有している結果から因子的妥当性が確認された⁴。また、各年齢時点における因子パターンがどの程度安定的であるかを評

価するために一貫性係数を算出したところ、.991 (4 歳-5 歳)、.989 (5 歳-6 歳)、.987 (4 歳-6 歳) となったことから、各年齢時点の因子パターンはほぼ同一であると判断された⁵。また、因子構造の性差について検討を行うために、男女児別に探索的因子分析(最小二乗法、プロマックス回転)を行い、同様の 3 因子構造を得たので、一貫性係数を算出した。その結果、.981~.995 という高い値を示し、因子構造は男女児別でも安定的であることが確認された⁶。

次に、4 歳から 6 歳までの 3 年間社会的スキルのデータが欠損値無くそろっている 2,625 名の縦断デー

Table 1 就学前児用社会的スキル尺度の因子分析結果 (プロマックス回転後)

	4 歳			5 歳			6 歳		
	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3
第 1 因子 協調 ($\alpha = .95, .96, .98$)									
誰かが失敗すると励ましたり慰めたりする	.90	-.06	-.04	.88	-.04	-.03	.90	.00	-.03
寂しそうな友達を元気づける	.86	-.06	-.02	.84	-.02	.00	.88	-.03	-.03
誰かが上手にできたら「じょうず」とほめる	.83	-.05	.03	.84	-.05	.03	.87	-.06	.05
いいと思ったらその人に「いいね」という	.83	-.03	-.02	.83	-.03	.01	.86	-.02	.02
誰かが上手にできたら嬉しい	.73	.10	-.03	.77	.06	-.03	.81	.03	.00
自分から友達を手伝う	.70	.09	-.02	.74	.05	-.02	.76	.10	-.04
怪我をした友達を助ける	.69	.07	.04	.71	.08	.01	.71	.13	-.01
自分にできることはないかきく	.65	.01	.03	.67	.00	.02	.70	.09	-.01
友達に何か頼まれると手助けする	.55	.23	.04	.62	.18	.02	.58	.26	.02
他の子に思いやりの行動を示す	.41	.24	.16	.43	.23	.15	.45	.24	.15
第 2 因子 自己制御 ($\alpha = .93, .95, .97$)									
ほしいものがあっても説得されれば我慢できる	.02	.78	-.10	.00	.74	-.02	.02	.78	-.08
必要な場面ではお行儀よくしてられる	-.02	.69	-.03	-.03	.69	-.03	-.02	.69	-.04
大勢の人の中で駄々をこねない	.00	.69	-.08	-.06	.71	-.06	.09	.62	-.10
「あとで」と言われて待つことができる	-.03	.68	.07	-.01	.64	.14	-.03	.71	.09
人の話を最後まできく	-.01	.61	.10	.06	.60	.04	.02	.61	.02
おもちゃの貸し借りをする	.12	.59	.08	.22	.47	.11	.16	.63	.08
持っているものを他の子とわけあう	.20	.54	.08	.25	.52	.05	.24	.54	.09
他の子に攻撃的な態度をとらない	-.05	.53	-.03	.00	.53	-.07	.05	.51	-.07
自分の意見と違っていてもみなが決めたことにしたがう	.21	.50	-.13	.21	.51	-.08	.19	.60	-.05
順番がわかる	.07	.48	.19	.11	.46	.17	.08	.57	.12
第 3 因子 自己表現 ($\alpha = .89, .90, .91$)									
誰かが話をしたら何らかに明らかな反応をする	-.11	.01	.70	-.10	.02	.76	-.09	.04	.76
何かしてもらおうと、嬉しそうな顔をする	-.01	-.06	.60	.00	-.09	.76	-.02	-.05	.76
誰かが話をしたら顔を見る	-.12	.13	.60	-.17	.15	.69	-.17	.16	.71
気持ちを顔に出す	.09	-.23	.64	.08	-.22	.71	.11	-.22	.66
人に近づきおしゃべりをする	.14	-.13	.62	.21	-.05	.54	.14	-.06	.67
話をするときには顔を見る	-.08	.17	.60	-.01	.28	.45	-.01	.27	.45
誘われれば遊び仲間に入れる	.06	.14	.53	.05	.19	.42	.12	.28	.32
挨拶をする	.12	.04	.44	.18	.07	.37	.08	.02	.60
見たりきいたりしたことを自分から話せる	.26	.06	.39	.32	.00	.41	.32	.16	.28
自分の姓と名を言える	.05	.10	.30	.08	.15	.28	.11	.26	.20
寄与率(%)	21.67	15.70	13.91	27.03	17.45	17.06	24.42	15.97	16.51
因子間相関	F1	F2		F1	F2		F1	F2	
	F2	.52		.55			.61		
	F3	.41	.43	.44	.45		.39	.48	



発達の変化を示すため、4・5・6歳の3時点すべてで評定が行われた2625名の児に限って結果を示した。図中の数値は平均値、括弧内の数値は標準偏差。

Figure 1 社会的スキル尺度下位次元得点の年齢時点ごとの発達の变化

タを用いて、各下位次元すなわち協調、自己抑制及び自己表現の各年齢時点における平均得点、標準偏差を示し、4歳から6歳までの3年間の発達の变化を男女児別に Figure 1 にまとめた。自己表現を除く2つの下位次元は年齢に伴った発達の变化を示していることが分かる⁷。これより、自己表現は4～6歳時点における

⁴ 第3因子の一部において因子負荷量が十分ではないものも含まれているが、いずれかの年齢時点において.30以上の因子負荷量を示しているため、先に示した項目採用の基準の通り、項目として採用された。ただし、4～6歳すべてではなく、そのうちの限定的な年齢時点のみを測定対象とする場合には、因子負荷量の低い項目を除外して、尺度構成を行うことも選択肢の一つとして考えられる。

⁵ 本論文では、性別や年齢時点による因子構造の比較を一致性係数の観点から行ったが、構造方程式モデリングによる多母集団分析によって比較することも可能である。

⁶ 誌面の都合上、男女児別に行った探索的因子分析の結果のTableは掲載しなかった。詳細は著者に問い合わせ可能である。

⁷ ただし、検定では3下位次元すべてにおいて発達の变化が見られた。

通常の発達では獲得されにくい可能性が示唆された。ただし、自己表現はどの時点で年齢に応じた発達が見られるのかという点については3歳以下を対象にした調査と分析が必要であろう。また、4～6歳時点において自己表現に問題を呈する子どもたちに対してこそ、SSTをはじめとする訓練手法が有効な手立てとなる可能性が示されたと言える。また、6歳の自己主張を除くすべてにおいて、女児のほうが尺度得点が高い有意な性差が見られた。Meier(2000), Merrell & Poppinga (1994), 庄司(1994)などは社会的スキルに性差(主に、女児>男児)が見られることを報告しているので、今後も引き続き検討が必要である。

さらに、信頼性について、尺度の内的一貫性を表すクロンバックの α 係数と時間的安定性を表す再検査信頼性の観点から検討した。協調の α 係数は.95～.98, 自己抑制は.93～.97, 自己表現は.89～.91となり、十分な値を示した。また、再検査信頼性について確認するために、下位尺度得点ごとに相関係数を算出した。その結果、協調は $r=.77\sim.86$, 自己抑制は

$r = .87 \sim .92$, 自己表現は $r = .89 \sim .93$ といずれも非常に高い数値を示し、尺度の安定性はほぼ満たされることが確認できた。いずれの下位尺度次元においても、十分な内的一貫性、再検査信頼性をもつことが確認できたことから、これらの尺度は安定した特性を測定していると考えられる。しかし、「本尺度によって測定される社会的スキルの個人差が安定的な特性を反映していること」と「社会的スキルは固定的で変容不能であること」は決して同等ではなく、社会的スキルは学習によって事後的にでも獲得可能である点を強調しておきたい。対人関係に問題を抱える子どもは、これまでに社会的スキルを学習する機会に恵まれなかった、不適切な対応の仕方を学習してきた、といったことを意味する(佐藤, 1996b)。

以上の結果から、本研究で開発された4～6歳の就学前児を対象とした社会的スキルの個人差を測定するための尺度の因子的妥当性及び内的一貫性、再検査信頼性は高いと判断し、Table 1に示した3因子各10項目計30項目を「就学前児用社会的スキル尺度」とした。

研究 2

研究2では、研究1で作成し、就学前期において性別を超えて安定的な因子構造を示した「就学前児用社会的スキル尺度」の更なる妥当性を検証するため、この尺度が同時期の問題行動及び自閉傾向と関連を持つかどうか、また1年後・2年後の問題行動及び自閉傾向を予測するかどうか、という2点について検討を行う。

幼児期の子どもの問題行動は、内在化問題と外在化問題の2つに大別される(Achenbach & Edelbrock, 1978; 菅原, 2003)。内在化問題は、過剰な不安や恐怖、抑うつなど、他人よりも本人に問題を生じさせる問題行動であり、一方の外在化問題は、注意の散漫や攻撃性など、状況に応じて自らの行動を統制することができず、周囲の大人や仲間たちに迷惑をかける問題行動である。社会的スキルは、同時点もしくは将来の問題行動や社会的不適応、学業成績の低さと関連することが数多く報告されている(Gresham & Elliott, 1990; Malecki & Elliott, 2002; 中台・金山, 2002; Stormshak & Webster-Stratton, 1999; Teo, Carlson, Mathieu, Egeland, & Sroufe, 1996; Van Horn et al., 2007)。例えば、Stormshak & Webster-Stratton (1999)は社会的スキルと外在化問題との間に $r = -.65$ の有意な負の相関、Malecki & Elliott (2002)は社会的スキルと学業成績の間に

$r = .31 \sim .54$ の有意な正の相関、Van Horn et al. (2007)は社会的スキルの高次因子と問題行動の高次因子との間に $-.72$ の相関をそれぞれ報告している。また、広汎性発達障害のひとつである自閉症は、対人的相互作用に問題を有し、行動や興味が限定され、反復的・常動的な行動様式を取るため(American Psychiatric Association, 1994)、社会的な文脈におけるコミュニケーションに問題があるとされている(Frith, 1996)。

以上を踏まえると、就学前児用社会的スキル尺度は、内在化問題、外在化問題、自閉傾向といずれも負に相関することが予測されるので、研究2では、この点について検討し、就学前児用社会的スキル尺度の基準関連妥当性(併存的妥当性、予測的妥当性)の検証を行う。

方 法

被調査児 研究1と同様である。ただし、分析に使用するすべての項目で欠損値がない児のデータのみを対象として解析を行った。

調査に使用した項目 社会的スキルについては、研究1で開発した就学前児用社会的スキル尺度(30項目、3件法)を使用した。内在化問題、外在化問題、自閉傾向については、園児用発達チェックリスト(安梅ら, 2007)の「気になる行動」に含まれる66項目のうち、American Psychiatric Association (1994)による精神疾患の分類と診断の手引き(*Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*, 4th ed., DSM-IV)に基づいて、専門家(大学教授1名、大学専任講師1名)が行為障害・反抗挑戦性障害・大うつ病・広汎性発達障害など内在化問題、外在化問題、自閉傾向と類似の診断基準に当てはまるとした各6項目計18項目を評定に使用した。内在化問題を評価する具体的な項目は、「友達や大人に対して関心を引く行動が少なく、大人しい」、「新しい場面にすぐ慣れない」、「よく泣く」、「自分から仲間に入れず、臆病」、「人見知りする」、「疲れやすい」の6項目で、外在化問題を評価する具体的な項目は、「ものを取り上げる」、「乱暴する」、「他の子のじゃまをする」、「けんかが多い」、「いたずらが激しい」、「自分勝手な行動が多い」の6項目であった。また、自閉傾向を評価する項目は、「視線が合わない」、「友達に関心を示さない」、「ことばの遅れがある」、「子どもや大人の身振りのまねをしない」、「身近にある特定のものに興味を集中させる」、「同じ行動をよく繰り返す」の6項目であった。いずれの項目も、「ない」、「ときどき」、「いつも」の0点から2点までの3件法で評定された。

結果と考察

4～6歳時点の社会的スキル得点(協調, 自己抑制, 自己表現)と気になる行動(内在化問題, 外在化問題, 自閉傾向)の相関係数を Table 2 に示す。社会的スキル各下位尺度得点と3つの気になる行動の間の相関は, 4歳時点において $r = -.12 \sim -.48$, 5歳時点において $r = -.18 \sim -.49$, 6歳時点において $r = -.20 \sim -.53$ となり, 予測通りすべてにおいて有意な負の相関を示した。また, 社会的スキル得点と1年後もしくは2年後の気になる行動の相関は, $r = -.14 \sim -.49$ (4歳→5歳), $r = -.24 \sim -.49$ (5歳→6歳), $r = -.19 \sim -.49$ (4歳→6歳)となり, こちらも予測通りすべてにおいて有意な負の相関を示した。以上の結果より, 就学前児用社会的スキル尺度は, 十分な基準関連妥当性(並存的妥当性と予測的妥当性)を示したと言える。

Gresham & Elliott (1990) は, アメリカの子どものデータにおいて, 社会的スキルの低さと問題行動の相関を $r = -.14 \sim -.26$ (内在化問題), $r = -.27 \sim -.67$ (外在化問題)と報告しており, これは社会的スキルと外在化問題との関連性の強さを窺わせる結果と言える。それに対して, 本研究における日本の子どものデータは, 内在化問題と社会的スキルの低さの相関のほうが相対的に大きいという結果を示している。庄司(1994), 佐藤

(1996a) は, 国内においては外在化問題(反社会的行動)にも増して, 内在化問題(非社会的行動)に強く焦点が当てられ始めたことを報告している。教育の現場では, 乱暴で集団から逸脱する外在化問題は目に付きやすく, 保育士・幼稚園教諭も管理しやすい。その一方で, 内気で比較的大人しい内在化問題は, 保育士・幼稚園教諭の目に留まりにくい傾向があるのかもしれない。しかし, そういった目に留まりにくい内在化問題を呈する子どもの方が却って社会的スキルが低い傾向にあるという今回の結果は, 一見すると大人しくて目立たない子どもへの関与を高めていく必要性を示唆するものと言えよう。また, 自閉傾向と有意な負の相関を持っていることより, 本尺度は軽度発達障害児に対する早期介入のためのスクリーニング尺度として有効に機能し得ることを示している。社会的スキルを適切に獲得することができれば, その獲得された社会的スキルは問題行動や自閉傾向の萌芽や始発の防御要因として機能すると考えられるので, 本尺度は今後早期介入のための適切な評価の一助となることが期待される。

結 論

本研究は, 全国規模のコホート調査データを元にして, 就学前期(4～6歳)における社会的スキルの個人差を測定するツールを提供し, その信頼性と妥当性の検

Table 2 社会的スキルと気になる行動の相関係数

		社会的スキル								
		4 歳			5 歳			6 歳		
		協調	自己抑制	自己表現	協調	自己抑制	自己表現	協調	自己抑制	自己表現
気 に な る 行 動	4 歳	内在化問題 ($n=2402$)	-.42	-.41	-.47					
		外在化問題 ($n=456$)	-.19	-.34	-.12					
		自閉傾向 ($n=451$)	-.33	-.37	-.48					
	5 歳	内在化問題 ($n=2381$)	-.40	-.41	-.49	-.46	-.43	-.49		
		外在化問題 ($n=316$)	-.14	-.30	-.21	-.20	-.31	-.18		
		自閉傾向 ($n=314$)	-.28	-.33	-.43	-.32	-.34	-.46		
	6 歳	内在化問題 ($n=2310$)	-.43	-.40	-.49	-.48	-.44	-.49	-.53	-.47
		外在化問題 ($n=291$)	-.21	-.30	-.19	-.24	-.31	-.19	-.29	-.37
		自閉傾向 ($n=291$)	-.28	-.30	-.44	-.29	-.30	-.42	-.34	-.37

※ すべての相関係数は, $p < .001$

討を行った。研究1では、協調・自己抑制・自己表現という3因子構造 (Gresham & Elliott, 1990) が国内の就学前児においても見られるかどうか、そしてまたその構造は安定的かどうか、という2点に着目しながら、尺度の構成を試みた。因子分析の結果、想定された3因子構造が得られ、かつ一貫性係数の観点からその構造は就学前期の3年間において男女児別に見ても非常に安定的であることが示された。また、今回構成した3因子各10項目計30項目の「就学前児用社会的スキル尺度」は、クロンバックの α 係数、再検査信頼性とも高い数値を示し、項目内容の等質性、時間的な安定性の側面から十分な信頼性が確認できた。次に、研究2では、本尺度における外的基準として、3つの気になる行動 (内在化問題, 外在化問題, 自閉傾向) を考え、これらとの相関を算出することによって、尺度の基準関連妥当性の検討を行った。その結果、社会的スキルの各下位尺度得点は、予測通り、同時点・1年後・2年後において、3つの気になる行動と有意に負に相関していたので、並存的妥当性・予測的妥当性ともに十分な尺度であることが確認された。

以上を踏まえると、本尺度の特徴及びオリジナリティは、以下の3点である。本尺度は、4～6歳の就学前期における社会的スキルを同一の物差しの上で測定できる尺度構成を目指したことに主たる特徴の一つがある。庄司 (1991) は、小学生用の社会的スキル尺度を大学生に適用し、社会的スキルのレパートリーは変容しないことを示しているが、就学前期という特定の発達段階にターゲットを絞ったうえで、社会的スキルの構造について検討を行った研究は本研究が初めてである。また、本尺度は、スクリーニングのために最も有用であると考えられる外的基準すなわち問題行動や自閉傾向といずれも中程度の負の相関を持ち、本尺度によって測定された社会的スキル得点は1～2年後の問題行動や自閉傾向を有意に予測することが確認された。本尺度を用いてスクリーニングを行うことによって、問題行動や自閉傾向に対して、その萌芽や始発のレベルで早期介入できる可能性が非常に高い。これが2点目の特徴である。また、3点目として、本研究は国内において社会的スキルを扱った大規模かつ全国的なコホート調査によって得られた初めての結果であり、本研究の結果の外的妥当性は非常に高いと考えられる。

NICHD Early Child Care Research Network (1998, 2002) は、質の高い保育は在宅保育よりも、子どもの発達に良い影響を与え、家庭のリスクを軽減すると報告している。社会的スキル獲得の観点から考えれば、家

族以外の多数のメンバーと触れ合う場所である保育所や幼稚園は、社会的スキルを身に付ける場所として適していると考えられる。よって、質の高い保育の一貫として、保育所や幼稚園で集団実施形式のSSTなどの訓練手法が行われれば、就学前児の社会的スキルの良好な発達が促進される可能性があると言える。保育所や幼稚園においてSSTが実施されれば、トレーニングの成果はすぐさま園における仲間関係に適用可能であり、トレーニングの成果が適切に運用できているかどうか保育士、幼稚園教諭もすぐにその場で確認できるという利点がある。もちろん、社会的スキルをはじめとする子どもの心身の発達は、保育所や幼稚園の保育時間でのみ良好な発達が促進されるわけではない。実際、安梅 (2004)、Anme & Segal (2004) は、保育の「時間」よりも家庭における関わり方の「質」や養育態度の「質」が、子どもの健全な発育と関連していることを示している。よって、今後の課題としては、今回の全国大規模の縦断的調査データに対して、共変量調整を行った潜在成長曲線モデル (星野, 2005; Hoshino, Kurata & Shigemasu, 2006)などを適用し、子どもの社会的スキルの発達と親の養育態度との関連を検討し、家庭内や家族関係における親子の関わり方に対して、より直接的に介入に寄与する示唆を与えていくことなどが考えられる。

引用文献

- Achenbach, T. M., & Edelbrock, C. S. (1978). Classification of child psychopathology : Review and analysis of empirical efforts. *Psychological Bulletin*, 85, 1275-1301.
- 相川 充 (1996). 社会的スキルという概念 相川 充・津村俊充 (編) 社会的スキルと対人関係 (pp. 3-21) 誠信書房
- 相川 充 (2000). 人づきあいの技術 社会的スキルの心理学 サイエンス社
- American Psychiatric Association (1994). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (4th ed., DSM-IV). Washington, DC : Author.
- 安梅勅江 (2004). 子育て環境と子育て支援—よい長時間保育の見わけかた— 勁草書房
- Anme, T., & Segal, U. A. (2004). Implications for the development of children in over 11 hours of centre-based care. *Child : Care, Health and Development*, 30, 345-352.

- 安梅勅江・篠原亮次・杉澤悠圭・丸山昭子・田中 裕・酒井初恵・宮崎勝宣・西村真美 (2007). 子どもの発達の全国調査にもとづく園児用発達チェックリストの開発に関する研究 厚生の指標, **54**, 36-41.
- Argyle, M. (1981). The nature of social skills. In M. Argyle (Ed.), *Social skills and health* (pp. 1-30). London : Methuen.
- Bronfenbrenner U. (1979). *The ecology of human development : Experiments by nature and design* (pp.51-64). Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Caldarella, P., & Merrell, K. W. (1997). Common dimensions of social skills of children and adolescents : A taxonomy of positive behaviors. *School Psychology Review*, **26**, 264-278.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. (1983). Continuity of children's social status : A five-year longitudinal study. *Merrill-Palmer Quarterly*, **29**, 261-282.
- Combs, M. L., & Slaby, D. A. (1977). Social skills training with children. In B. B. Lahey & A. E. Kazdin (Eds.), *Advances in clinical child psychology* Vol. 1. New York : Plenum.
- Elksnin, L. K., & Elksnin, N. (1998). Teaching social skills to students with learning and behavior problems. *Intervention in School and Clinic*, **33**, 131-141.
- 江村理奈・岡安孝弘 (2003). 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究 教育心理学研究, **51**, 339-350. (Emura, R., & Okayasu, T. (2003). Classroom-based social skills education : Junior high school students, *Japanese Journal of Educational Psychology*, **51**, 339-350.)
- 遠城寺宗徳 (1978). 遠城寺式乳幼児分析的発達検査法 慶応義塾大学出版会
- Frankenburg, W. K., Dodds, J., Archer, P., Shapiro, H., & Bresnick, B. (1992). *The DENVER II training manual*. Denver, CO : Denver Developmental Materials.
- Frith, U. (1996). Social communication and its disorder in autism and Asperger syndrome. *Journal of Psychopharmacology*, **10**, 48-53.
- Gresham, F. M. (1981). Assessment of children's social skills. *Journal of School Psychology*, **19**, 120-133.
- Gresham, F. M. (1986). Conceptual and definitional issues in the assessment of children's social skills. *Journal of Clinical Child Psychology*, **15**, 3-15.
- Gresham, F. M. (2001). Assessment of social skills in children and adolescents. In J. W. Andrews, D. H. Saklofske, & H. L. Janzen (Eds.), *Handbook of psychoeducational assessment* (pp.325-355). NY : Academic Press.
- Gresham, F. M., & Elliott, S. N. (1984). Assessment and classification of children's social skills : A review of methods and issues. *School Psychology Review*, **13**, 292-301.
- Gresham, F. M., & Elliott, S. N. (1990). *Social Skills Rating System-Secondary*. Circle Pines, MN : American Guidance Service.
- 繁多 進 (1991). 社会性の発達とは 繁多 進・青柳 肇・田島信元・矢澤圭介 (編) 社会性の発達心理学 (pp.9-16) 福村出版
- 星野崇宏 (2005). 欠測群の周辺分布の母数に対する傾向スコアを用いた重み付きM推定量の提案と介入効果研究への応用 行動計量学, **32**, 121-132. (Hoshino, T. (2005). Propensity score weighted M estimation for general parametric models for groups with complete missingness and its application to intervention effects. *Japanese Journal of Behaviormetrics*, **32**, 121-132.)
- Hoshino, T., Kurata, H., & Shigemasa, K. (2006). A propensity score adjustment for multiple group structural equation modeling. *Psychometrika*, **71**, 691-712.
- 磯部美良・佐藤正二 (2003). 幼児の関係性攻撃と社会的スキル 教育心理学研究, **51**, 13-21. (Isobe, M., & Sato, S. (2003). Relational aggression and social skills of preschool children. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **51**, 13-21.)
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- 菊池章夫 (1989). 社会的スキルの問題 日本教育心理学会第 31 回総会発表論文集, L7.
- 菊池章夫・堀 洋道 (1988). 社会的スキルの研究の問題は何か 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, S 31.
- Kolb, S. M., & Hanley-Maxwell, C. (2003). Criti-

- cal social skills for adolescents with high incidence disabilities : Parental perspectives. *Exceptional Children*, **69**, 163-179.
- Korinek, L., & Popp, P. A. (1997). Collaborative mainstream integration of social skills with academic instruction. *Preventing School Failure*, **41**, 148-152.
- Malecki, C. K., & Elliott, S. N. (2002). Children's social behaviors as predictors of academic achievement : A longitudinal analysis. *School Psychology Quarterly*, **17**, 1-23.
- Matson, J. L., Esveltd-Dawson, K., & Kazdin, A. E. (1981). Validation of methods for assessing social skills in children. *Journal of Clinical Child Psychology*, **12**, 174-180.
- Matson, J. L., Heinze, A., Helsel, W. J., Kapperman, G., & Rotatori, A. (1986). Assessing social behaviors in the visually handicapped : The Matson Evaluation of Social Skills with Youngsters (MESSY). *Journal of Clinical Child Psychology*, **15**, 78-87.
- Matson, J. L., Macklin, C. F., & Helsel, W. J. (1985). Psychometric properties of the Matson Evaluation of Social Skills with Youngsters (MESSY) with emotional problems and self concept in deaf children. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **16**, 117-123.
- マトソン, J. L.・オレンディック, Y. H. (1993). 佐藤容子・佐藤正二・高山 巖 (訳) 子どもの社会的スキル訓練 社会性を育てるプログラム 金剛出版
- Matson, J. L., Rotatori, A. F., & Helsel, W. J. (1983). Development of a rating scale to measure social skills in children : The Matson Evaluation of Social Skills with Youngsters (MESSY). *Behaviour Research and Therapy*, **21**, 335-340.
- Meier, S. T. (2000). Treatment sensitivity of the PE form of the Social Skills Rating Scales : Implications for test construction procedures. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, **33**, 144-156.
- Merrell, K. W., & Poppinga, M. R. (1994). The alliance of adaptive behavior and social competence : An examination of relationships between the scales of independent behavior and the social skills rating system. *Research in Developmental Disabilities*, **15**, 39-47.
- 向井隆代 (2003). 友達と仲良くなりたい 桜井茂男・濱口佳和・向井隆代(編) 子どものころ一児童心理学入門 (pp.147-164) 有斐閣アルマ
- 中台佐喜子・金山元春 (2002). 幼児の自己主張, 自己抑制と問題行動 広島大学大学院教育学研究科紀要, **51**, 297-302.
- 中瀬 惇・西尾 博 (2001). 新版K式発達検査反応実例集. ナカニシヤ出版
- NICHD Early Child Care Research Network (1998). Relations between family predictors and child outcomes : Are they weaker for children in child care ? *Developmental Psychology*, **34**, 1119-1128.
- NICHD Early Child Care Research Network (2002). The interaction of child care and family risk in relation to child development at 24 and 36 months. *Applied Developmental Science*, **6**, 144-156.
- 二宮克美 (2006). 対人関係の発達 氏家達夫・陳省仁(編) 基礎発達心理学 (pp.151-165) 放送大学教育振興会
- 岡田 智 (2003). 指導のためのソーシャル・スキル尺度作成の試みー社会的コンピテンスの視点からのLD児支援ー LD研究, **12**, 56-64. (Okada, S. (2003). Construction of a social skills scale for training : Support for children with LD : From the viewpoint of social competence, *Japanese Journal of Learning Disabilities*, **12**, 56-64.)
- Parker, J. G., & Asher, S. R. (1987). Peer relations and later personal adjustment : Are low-accepted children at risk ? *Psychological Bulletin*, **102**, 357-389.
- Pedersen, J. A., Worrell, F. C., & French, J. L. (2001). Reliability of the social skills rating system with rural Appalachian children from families with low incomes. *Journal of Psychoeducational Assessment*, **19**, 45-53.
- 佐藤正二 (1996 a). 引っ込み思案と社会的スキル 相川 充・津村俊充(編) 社会的スキルと対人関係 (pp.93-110) 誠信書房

- 佐藤正二 (1996 b). 子どもの社会的スキル・トレーニング 相川 充・津村俊充 (編) 社会的スキルと対人関係 (pp.171-200) 誠信書房
- 嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 (1996). 児童の社会的スキル獲得による心理的ストレス軽減効果 行動療法研究, **22**, 9-20. (Shimada, H., Togatashi, Y., Okayasu, T., & Sakano, Y. (1996). The buffering effects of acquired social skills on psychological school stress in elementary school children. *Japanese Journal of Behavior Therapy*, **22**, 9-20.)
- 庄司一子 (1991). 社会的スキル尺度の検討—信頼性・妥当性について— 教育相談研究, **29**, 18-25. (Shoji, K. (1991). Development of social skills rating scale : Its reliability and validity. *Bulletin of Counseling and School Psychology*, **29**, 18-25.)
- 庄司一子 (1994). 子どもの社会的スキル 菊池章夫・堀毛一也 (編) 社会的スキルの心理学 (pp. 201-218) 川島書店
- Stormshak, E. A., & Webster-Stratton, C. (1999). The qualitative interactions of children with conduct problems and their peers : Differential correlates with self-report measures, home behavior, and school behavior problems. *Journal of Applied Developmental Psychology*, **20**, 295-317.
- 菅原ますみ (2003). 個性はどう育つか 大修館書店
- 鈴木聡志・庄司一子 (1990). 子どもの社会的スキルの内容について 教育相談研究, **28**, 24-32. (Suzuki, S., & Shoji, K. (1990). The contents of children's social skill. *Bulletin of Counseling and School Psychology*, **28**, 24-32.)
- Teo, A., Carlson, E., Mathieu, P. J., Egeland, B., & Sroufe, L. A. (1996). A prospective longitudinal study of psychosocial predictors of achievement. *Journal of School Psychology*, **34**, 285-306.
- 津守 真・磯部景子 (1965). 乳幼児精神発達診断法—3才から7才まで 大日本図書
- Tucker, L. R. (1951). *A method for synthesis of factor analysis studies*. Washington, DC : Department of the Army, Personnel Research Section Report No. 984.
- Van Horn, M. L., Atkins-Burnett, S., Karlin, E., Ramey, S. L., & Snyder, S. (2007). Parent ratings of children's social skills : Longitudinal psychometric analyses of the Social Skills Rating System. *School Psychology Quarterly*, **22**, 162-199.
- Walthall, J. C., Konold, T. R., & Pianta, R. C. (2005). Factor structure of the Social Skills Rating System across child gender and ethnicity. *Journal of Psychoeducational Assessment*, **23**, 201-215.
- 渡邊朋子・岡安孝弘・佐藤正二 (1999). 幼児用社会的スキル尺度の標準化に関する研究 日本行動療法学会第25回大会発表論文集, 104-105.

謝 辞

全国夜間保育園連盟の天久薫会長をはじめ、本研究にご協力いただいた連盟の皆様、保護者の皆様と幼児の皆様に深謝致します。また、本研究の一部は、子ども家庭総合研究(主任研究者 安梅勲江)、平成19年度科学研究費補助金(課題番号19330126, 研究代表者 安梅勲江)、平成18年度科学研究費補助金(課題番号18730406, 研究代表者 星野崇宏)からの助成を受けて実施されました。

(2007.5.11 受稿, 11.17 受理)

Social Skills of Preschoolers : Stability of Factor Structures and Predictive Validity From a Nationwide Cohort Study in Japan

YUSUKE TAKAHASHI, KENSUKE OKADA (GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES, THE UNIVERSITY OF TOKYO, THE JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE), TAKAHIRO HOSHINO (GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES, THE UNIVERSITY OF TOKYO) AND TOKIE ANME (GRADUATE SCHOOL OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2008, 56, 81-92

Social skills are positive abilities that help children to interact with others in various situations. Many previous studies have found that failure in acquiring social skills or atypical development of social skills is predictive of later problem behavior, social maladjustment, and low academic achievement. Currently, however, few scales exist to measure the social skills of Japanese preschoolers. In Study 1, a large-scale cohort study was used to develop a scale that enables an appropriate measure of individual differences in preschoolers' social skills. The obtained 3-factor structure was consistent with published studies done in Western countries, and the scale was found to have excellent internal consistency and temporal stability. In Study 2, the relation between the newly developed scale, problem behavior, and autistic tendencies was analyzed. The results confirmed that the present scale demonstrates both concurrent and predictive validity. It is possible that early intervention based on screening with this scale might assist children to develop soundly.

Key Words : social skills, cohort study, problem behavior, preschoolers